

研究に協力してくれた方々への感謝

社会マネジメント学科 松 崎 吉之助

2021年度はいくつかの研究活動に取り組んだが、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、当初想定していた研究活動を行うことができなかった。ここで、改めてこの1年間の自分自身の研究活動について振り返りを行いたい。

1. 医療機関を起点とした生活課題をもつ人への地域連動型支援プログラムの開発研究

高齢化に伴い急増している心不全の人に対する、支援プログラムの開発研究を2021年度よりスタートさせた。自分自身の主な担当は心不全の人に対するインタビュー調査となり、医療機関にインタビュー対象者の選定、紹介、医療面でのアドバイスなどを依頼した。医療機関の倫理審査委員会を承認の手続きを進めようと準備していた矢先に新型コロナウイルス感染症の感染が拡大し、作業を進めることができなくなった。協力を依頼していた医療機関でも日々新型コロナウイルス感染症の対応に追われ、研究協力を行う状況にはないことは想像ができたため、状況が落ち着くことをただ願いながら、文献の整理、インタビューガイドの見直しなどを中心に行った。その後、第5波が落ち着いた12月に医療機関の倫理審査委員会で承認を得ることができた。

医療機関やインタビュー協力者に負担、不利益を被ることがないことが研究の絶対条件である為、研究領域的にコロナ禍で研究活動を行うことの難しさを痛感した1年であった。幸いにも、医療機関、インタビュー協力者の方にはこの研究の意義を理解していただくことができ、少しずつであるが研究を前に進めることができている。

2. 知的障害・発達障害のある若者の大学での学びのニーズ調査

これまで大学での学ぶ機会が十分に確保されてこなかった知的障害や発達障害がある若者が、大学で学ぶ際にどのような学びを求めているのか明らかにするための調査研究を相模原市発達障害支援センターと協働で行った。この研究では知的障害や発達障害がある若者と、ともに学ぶ本学学生の両方を当事者として位置づけ、当事者主体の調査研究手法であるインクルーシブ・リサーチの手法を用いた。毎月1回ミーティングを行ったほか、先進的な取り組みを行っている団体の調査見学なども行った。新型コロナウイルス感染症の影響で、予定通り調査見学を進めることができなかったが、各施設の方の協力を得て、いくつかの取り組みを実際に見学することができた。対面でのミーティングが行えず、オンラインで開催することもあったが、徐々にメンバーの交流も進み、主体的な取り組みが行われるようになった。本来であれば、メンバー間の交流促進のために会食等も行うことができればよかったが、コロナ禍の中で十分な取り組みが行えたのではないかと感じている。

新型コロナウイルスに振り回され、思うように活動できずストレスを感じたこともあったが、協力してくださる方の有難さを改めて実感した1年であった。研究協力者にとって、研究への協力は義務ではない。それにも関わらず、こうした状況の中で協力していただいた多くの方に心から感謝の意を表したい。